

『海国図志』と日本 その2 —和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について—

阿 川 修 三

『HǎiGuó TúZhì (海国図志)』 and Japan The Second

Shuzo Agawa

This paper considered 和刻本 (Wakokubon) and 和解本 (Wagebon: translation book) of "海国図志 (HaiGuoTuZhi)" which were published in Japan of the end of Edo Period. Those have 7 kinds of 和刻本 and 14 kinds of 和解本. 和刻本 was published for the person with high literacy, and 和解本 was published for those whose literacy is not high. The published "海国図志" was the portion which stated the situation of European and American which asked Japan for the opening of a country and commerce and a portion which considers how a country is defended against European and American.

Since publication of the "海国図志" in Japan was in agreement with the place which a Japanese of those days wants to know, it gained many readers.

0 はじめに

幕末において、『海国図志』は、「方今魯（ロシア、筆者注以下同じ）、墨（アメリカ）、暗（イギリス）、拂（フランス）、交々我が国に來たり、魏源の書（『海国図志』等）大いに我が国に行わる」（『吉田松陰全集』第四卷p.52、岩波書店、1938年）というように、他のどの地理書よりも、

日本ではよく読まれた。その読者の中には、『海国図志』を読むことにより、西洋の政体や政治理念に接近し、それを契機の一つとして、攘夷派から、従来の儒教的思考枠組みを組み替え、攘夷の不可なるを悟り、その世界観を転換していった人々もかなりいたのである。⁽¹⁾

前号の「『海国図志』と日本—塩谷世弘、箕作阮甫の訓点本について」では、日本での『海国図志』諸本の中で最も知られている塩谷世弘、箕作阮甫の訓点本（和刻本）の由来、内容について主に論じた。本稿では、日本での『海国図志』の受容を考察するために、まず、『海国図志』がいかなる書物であるかを押さえた上で、日本で刊行された『海国図志』の諸本について、書物としての形態、その形態から予想される読者層、その作者の出版意図について論じていきたい。つまり、日本で刊行された『海国図志』の諸本、即ち書物と言う情報の発信側について論じたいのである。そのことを通して、幕末における日本の知識人の世界事情受容の状況をまず情報の発信側から見て、かれらの世界観の転換過程を考察し、広くは幕末の思想状況を探る一助としたいのである。

1 中国初の本格的な世界地理書『海国図志』

『海国図志』は魏源が編纂した、中国初の本格的な世界地理の書物である。初版は道光二十二（1842）年五十巻、第二版は道光二十七（1847）年六十巻、第三版は咸豊二（1852）年百巻である。これから取り上げる日本諸刊本は全て第二版を底本としている。

この書物は、魏源が著したものではなく、林則徐から託された『四洲志 Hugh Murray（慕瑞）の『The Encyclopedia of Geography（世界地理大全）1834年』を林則徐が梁進徳に漢文に抄訳させたものを藍本とし、それに漢訳洋書（来華宣教師が著した西学書）や正史などの抜粋を加えたものである。魏源の文は六十巻本で見ると、巻頭の「原叙」、

「後叙」の他には、「籌海篇」、「海国沿革図叙」、「叙東南洋」、「南西洋五印度志」、「小西洋」、「大西洋歐羅巴洲各国総叙」、「北洋俄羅斯国志」、「外大西洋墨利加洲総叙」などそれぞれの地域の最初にある叙と、巻の初めに置かれることがある「案」で始まる文だけである。そのような『海国図志』の由来から、日本諸刊本の扉には「歐羅巴人原撰 侯官林則徐訳 邵陽魏源重輯」（正木篤『美理哥国総記和解』）となっているものもあるのである。当時、日本人が『海国図志』を読み、この記述が信頼にたると判断した根拠は、『海国図志』が「此の編は則ち欧人の撰に原づく」（塩谷世弘「『海国図志』を翻刻するの序」）、つまり、その基づく資料が、中国人が書いた荒唐無稽な書物ではなく、既に述べたようにヨーロッパ人自身が書いたものであると言う点にある。

ただし、『海国図志』の編纂には、「夷の長技を師として、夷を制」（『海国図志』叙）するという、魏源の夷狄（欧米を指す）に対する原則が貫かれており、籌海（海防論）や「夷の長技」である堅艦利砲（西洋の精巧な武器、堅牢な蒸気船）にもかなりの紙幅が割かれている。『海国図志』は単なる地理書ではなく、当時、日本の知識人に「武経大典」（塩谷宕陰「『海国図志』を翻刻するの序」）と言われる所以である。当時、日本では、欧米列強の侵略の手が日本にも及ぶという危機感が、アヘン戦争の清国敗北を契機にして、高まっており、籌海（海防論）や「夷の長技」である堅艦利砲（西洋の精巧な武器、堅牢な蒸気船）の諸編は日本人にとって渴望するところであった。

また、『海国図志』には欧米諸国の地理のみならず、その歴史が詳細に記されていて、その記述は「博」でもあり、また「繁」でもあった。当時日本人は、夷狄（欧米列強）に対抗するには、まず夷情（欧米列強の事情）を知る必要を痛感した。この夷情とは、単なる地理的知識ではない。特にそこに住む人々の「風俗人情」、これはそこに住む人々の歴

史の中に現れているものであるが、それを最も渴望した。この点で『海国図志』は格好の資料であった。ほぼ同時期に、日本には『坤輿図識』正統、中国には『瀛環志略』という簡にして、正確な地理書があり、これらもよく読まれたが、『海国図志』に当時の日本知識人が求めたのは単なる地理知識ではない、既に述べたように、欧米列強から日本を守るための海防なり、西洋の武器の知識であり、また、欧米列強の「風俗人情」を理解するための、その歴史であったのである。

また、本書の編纂はその発端が林則徐の委託によるものではあるが、この困難な事業を支えたのは魏源の強い憂国の志、経世意識である。これに多くの日本知識人が共感している。

なお、『海国図志』の諸本が刊行される前に、同じく魏源が著した『聖武記』は抄本であるが、鷲津毅堂編『聖武記採要』（嘉永三（1850）年）が出版されて、その「洋夷（欧米列強）」に如何に対抗するかという魏源の意図は多くの日本知識人に共感をもって理解され読まれた。この点が『海国図志』が日本で読まれるきっかけの一つとなったことは間違いない。

以上のように、幕末日本に於いて『海国図志』が多くの読者を獲得したのは、著者魏源と幕末日本の読者の意図が一致したからにほかならないのである。

2 日本刊行『海国図志』諸本とのその形態

筆者は日本における『海国図志』の受容を研究するに当たり、まずは京都大学人文科学研究所の漢籍データベースや主要な大学、研究機関の『漢籍目録』などを手がかりに、その日本刊行の諸本を实地調査した。⁽²⁾しかし、結局のところ、鮎澤信太郎氏が、『鎖国時代日本人の海外知識』〔世界地理の部 四 幕末開国期に伝来した唐本世界地理書の翻刻と邦訳〕（復

『海国図志』と日本 その2—和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について—

刻版 原書房、1980年)で述べている諸本以上には、後に述べる訓訳本の稿本一点を除いて、発見することができなかった。鮎沢氏が戦前に行った、『海国図志』の文献研究は一部に誤認があるものの⁽³⁾周到である。

さて、日本で刊行された『海国図志』の諸本は、書物の形態から和刻本、和解本に分けることができる。つまり、本文を校訂し、それに訓点を付した和刻本と、本文を和語(日本語)に訳した和解本に分けることができるのである。その総数は21点であり、その内訳は和刻本(訓点本)7点、和解本14点である。⁽⁴⁾

本章では、その諸本を和刻本、和解本に分け、それぞれ刊行順に並べ、同じ作者のものはその中で刊行順に並べる。筆者の現地調査に基づき、本ごとに、1 作者名(和刻本の場合は校訂者、和解本の場合は和解した者の氏名)、2 書名、3 巻数、冊数、4 出版時期(奥付の出版時期、叙、跋等の執筆時期、『市中取締続類集』『書籍』⁽⁵⁾に掲載のあるものは、それに載る出版許可の時期を記す)、5 出版元(明記されている場合のみ)6 筆者が調査に用いた本の所蔵先、7 底本『海国図志』第二版六十巻での巻数、編名を記す。更に、本としての形態、そこから予想される読者層、叙、跋等に拠る出版意図についても述べることとする。

(1) 和刻本

『海国図志』には和刻本が7点ある。いずれもその原文を校訂したうえで、それに訓点を付し刊行したものである。

- 1 中山伝右衛門校正『海国図志墨利加(アメリカ)洲部』八卷六冊
(図1) 嘉永七(1854)年四月(同年五月許可、『市中取締続類集』
「書籍」による。以下同じ。) 出雲寺文治郎他発兌
- A 中山伝右衛門校正『海国図志墨利加(アメリカ)洲部』二卷二冊

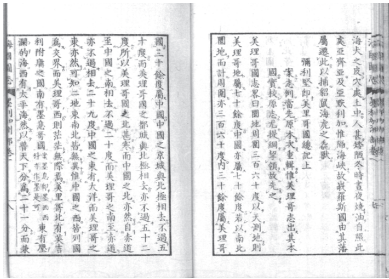


図1 海国図志墨利加洲部

嘉永七（1854）年四月（同年五月許可） 出雲寺文治郎他発兌【筆者所蔵】

B 中山伝右衛門校正『海国図志墨利加（アメリカ）洲部』（巻末に「火輪船図説」を付す）六卷四冊 嘉永七（1854）年四月（同年

七月許可） 出雲寺文治郎他発兌【東京都立中央図書館所蔵】

この本は奥付では、A、Bどちらも、刊行時期が「嘉永七年甲寅四月」となっているが、『市中取締続類集』「書籍」に残されたその出版許可申請書に拠れば、Aの二冊とBの四冊に分けて別々に提出されている。そもそも一つの書物に同じ出版年月の奥付が二つあるというのはどうしても不自然である。現在の図書館の所蔵データを見ると、全六冊のものが大半であるが、二冊だけのものもある。筆者の所蔵するAには、その二冊を入れる書名の印刷された袋があり、この二冊が別に出版された証拠である。以上のことから、実際の刊行時期は、前の二冊が刊行された後に、後の四冊が刊行されたものと思われる。

Aの二冊は、一冊目は、卷三十九「墨利加洲総説」、「弥利堅国総説上」を、二冊目は、卷三十九「弥利堅国総説下」を校訂し、訓点を付す。Bの四冊は、一冊目は、卷四十「弥利堅国東路二十部」を、二冊目は卷四十一「弥利堅国西路十一部」、卷四十二「墨西哥国 北墨利加洲西方三国 北墨利加洲西南四国 北墨利加洲西北土蛮 俄羅斯在北洲属地 英吉利在北洲属地」を、三冊目は卷四十三「南墨利加諸国」を、巻五十四「火輪船図説」を、四冊目は巻五十一「夷情備采上 澳門月報」を校訂し、訓点を付す。

『海国図志』と日本 その2—和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について—

なお、この本には、序、跋ともになく、和刻本では、この本だけが、校正の結果が全く明記されていない。

和刻本1の校訂者中山伝右衛門（1818～92）は如何なる人物か。鮎沢氏は前掲書で「中山は北総の人で、その名は成、士美と号した」とのみ記す。そこで、出版許可申請書（「市中取締統類集」「書籍」国立国会図書館所蔵）と『海国図志墨利加（アメリカ）洲部』の付図「弥理堅新図」⁽⁶⁾を手懸かりに調べてみると、伝右衛門は上総関宿藩藩主で老中久世広周の所領、下総猿島郡岩井村の豪農、素封家であることがわかった。名を元成、通称を伝右衛門と言ひ、蘭華・朝陽道人などと号した。素封家である中山家には儒学の河田迪斎（1806～1859）、川田剛（1830～1896）、信夫如軒（1835～1910）や蘭学の猪俣瑞英、蓮池新十郎などの学者たちが出入りしている。⁽⁷⁾

しかし、中山伝右衛門は和刻本『海国図志墨利加洲部』の出版名義人であって、校訂者ではない。校訂者は豪農中山家に三年間寄留して伝右衛門に漢学、剣術など諸芸を教えた河田迪斎である。迪斎はこの和刻本刊行当時、林家塾頭であり、林大学頭が幕府の文教政策を統括し、併せて外交を管轄していたので、米国代表ペリーとの日米和親条約締結交渉にあたっては、大学頭林復斎の補佐を務め、職務の関係で学問所に蔵されていた『海国図志』⁽⁸⁾の「墨利加洲部」を読み、その重要性に鑑み、和刻本を刊行するに至ったのであったが、『海国図志』にはキリスト教の記述が多くあり、林家塾頭である迪斎の名を出すことが憚られ、迪斎と長年昵懇の、彼にとってはパトロンというべき中山家の御曹司伝右衛門の名義を借りたのである。⁽⁹⁾ 出版資金も中山家から出ている可能性が高いのである。

2 塩谷甲蔵（世弘）、箕作阮甫『翻葉海国図志（籌海篇一、二 議

守上下、籌海篇三、四 議戦上下』二卷二冊 嘉永七（1954）年甲寅七月刻（同年九月許可）須原屋伊八発兌 【文教大学越谷図書館所蔵】

一冊目は、巻頭に塩谷世弘（甲蔵）「『海国図志』を翻栞するの序」、魏源の『海国図志』叙、『海国図志』総目があり、その後、巻一「籌海篇一 議守上」があり、それを校訂し、訓点を付す。

二冊目は、巻一「籌海篇二 議守下」、巻一「籌海篇三 議戦」、巻一「籌海篇四 議款」があり、それらを校訂し、訓点を付す。地名にはほとんどルビを付していない。

序文である「『海国図志』を翻栞するの序」では、塩谷は「此の編は則ち欧人の撰に原づく。実を取りて信を伝ふ（原文は漢文、書き下し文は筆者による。以下同じ）」と『海国図志』の記事の信頼性の高さを評価し、更に「而して精華の萃むる所は乃ち籌海、籌夷、戦艦、火攻の諸篇に在り。夫れ地理既に詳しく、夷情既に悉し、器備既に足り、以て守るべくは、則ち守り、以て戦ふべくは、則ち戦ひ、款すべきは則ち款す。之を左にし、之を右にす。惟だ其の資する所は、名は地志と為すも、其の実、武経大典なり（原文は漢文）」と『海国図志』は「武経大典」としての有用性を高く評価し、その出版の意義を述べている。

校訂者の一人塩谷世弘（1809～1867）は江戸末期の儒学者で、水野忠邦に仕え、幕府の儒官にも成った、大物儒者であり、校訂者のもう一人箕作阮甫（1798～1863）は津山藩藩医で、幕末随一の洋学者であり、『漢訳洋書の和刻本『大美聯邦志略（『亜美理駕合衆国志略』の和刻本）』、『地球説畧』も手がけ、欧米の地理、歴史への造詣が深かった。川路聖謨は殊の外、箕作を信頼しており、箕作は川路の依頼によりプチャーチンとの外交交渉で通訳の役割を務め、川路を大いに助けた。

『海国図志』と日本 その2—和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について—

この和刻本校訂では、塩谷が本文を校訂し、訓点を付し、箕作が読解の便をはかるために「洋音を行間に注を」付し、即ち外国の地名に読みを片仮名で付け、それぞれ分野を限って担当したのであったが、当時望みうる最高のコンビであった。

- 3 塩谷甲蔵、箕作阮甫『海国図志俄羅斯国部』二卷二冊 安政二
(1855)年乙卯十二月(同年十二月許可) 須原屋伊八発兌
【文教大学越谷図書館所蔵】

卷三十六「俄羅斯国総記」を校訂し、訓点を付す。奥付はない。地名にはルビを付す。

巻末に塩谷の「俄羅斯国志の後に書す」、「再び俄羅斯国志の後に書す」があり、前者では、アヘン戦争における清朝の無能ぶりを批判し、一方ロシア中興の祖ピョートル大帝の功績を讃え、後者では、「此れより辺防を講究し、最も鄂慮(ロシア)を以て念と為す。蓋し鄂慮、我と壤を接す。我が殷當は、彼の尤なり(原文は漢文)」と北方の脅威ロシアに備えるべきことを説く。

奥付がなく、本書には刊行時期が記されていないが、『市中取締続類集「書籍」』に拠れば、和刻本4『海国図志普魯社国』とともに出版許可申請が出され、安政二年十二月に許可が出ており、同時に刊行されたはずである。

- 4 塩谷甲蔵、箕作阮甫『海国図志普魯社国』一卷一冊 安政二(1855)
年十二月刻(同年十二月許可) 須原屋伊八発兌 【文教大学越谷
図書館所蔵】

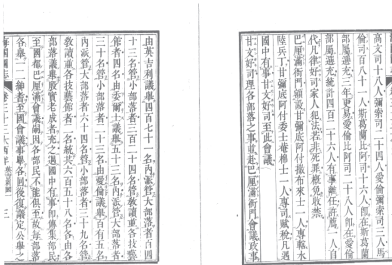


図2 海国図志英吉利国部

- 5 塩谷甲蔵、箕作阮甫『海国図志英吉利国部』三卷三冊(図2)安政四(1857年丙辰八月刻(同年正月許可) 須原屋伊八発兌【国立国会図書館所蔵】

卷三十三「英吉利国総記」、卷三十四「英吉利広述上」、卷三十五「英吉利国広述下」を校正し、訓点を付す。英国の地名、人名はもちろん、制度を表す名詞にも的確なルビを付す。

上巻の冒頭に塩谷の「英吉利国志に題す」、下巻の末尾に塩谷の「再び英吉利国志に書す」があり、共に凶悪な英吉利の脅威に備えるべきことを訴えている。(図2)

箕作阮甫は「英吉利国総記」冒頭の英国の政治制度を説明した部分にあるイギリスの政治制度を漢字に音訳した語に、ほぼ正確な読みを付けている。例えば、下院を表す音訳語、「甘文好司」には英語の原語「common house」に近い、「コムモンハウス」とルビを付けており、議を表す「巴里満門」には英語の原語「Parliament」に近い、「パルリメント」とルビを付けているのである。これはイギリスの政治にかなりの造詣がなければできないものではない

以上の、塩谷甲蔵(1809～1867)、箕作阮甫(1798～1863)による、和刻本2、3、4、5は、実は当時の海防掛(幕府の海防の総責任者)

卷三十八「北洋 普魯社国(ロシア)記、綏林国那威国(ノルウェー)総記、大尼国(デンマーク)、瑞丁(スウェーデン)」を校訂し、訓点を付す。地名にはルビを付す。序、跋はともにない。

『海国図志』と日本 その2一和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について一

である川路聖謨^{としあきら}がこの塩谷、箕作の両名に命じて刊行されたものである。そのことを、塩谷世弘は「此の書（『海国図志』）客歳（昨年）清商の始めて舶載する所と為る。左右衛門尉川路君^{じょう}之を獲て、其れ有用の書なりと謂う。命じて亟に翻栞せしむ。（塩谷世弘『『海国図志』を翻栞するの序』、原文は漢文）」と記している。川路は紅葉山文庫で『海国図志』を読み、その有用なことを知り、老中阿部正弘の許しを得⁽¹⁰⁾、当時の大物儒学者塩谷岩陰、洋学の泰斗箕作阮甫に命じ、和刻本2、3、4、5を校訂させ出版したのであった。出版費用は川路が私財を投じたようである。川路は当時、ロシア使節プチャーチンの交渉に当たり、また川路はその後海防掛（幕府の海防責任者）ともなり、その立場から、『海国図志』の中から「籌海（海防）篇」、「俄羅斯（ロシア）国」を選び、更に開国後の外交上最大の相手国である「英吉利国」を選んだと予測される。なお、「亜墨利加洲」は山中伝右衛門が出版を進めていたことを知っていて、選ばなかったのであろう。

川路は自己の職務遂行に理解を求めるため、これら和刻本を出版しており、その読者層としては、彼が行政上係わる有力大名、その重臣及び幕府要路の官僚を想定していたであろう。実際、川路はこれら和刻本を佐倉藩主堀田正睦（後の老中）に贈与しているのである。⁽¹¹⁾

- 6 頼子春（三樹三郎、頼山陽の三男）『海国図志 印度国部附夷情備采』三卷三冊 安政四（1857）年三月（同年同月許可）河内屋茂兵衛他（後印のみ奥付があり、書籍商の名が記されている）
【文教大学越谷図書館所蔵】

「海国沿革図」（図3）を巻頭に置き、巻十三「東南中三印度国」、巻十四「西印度之巴社回国、西印度之阿丹回国」、巻五十三「夷情備采下」

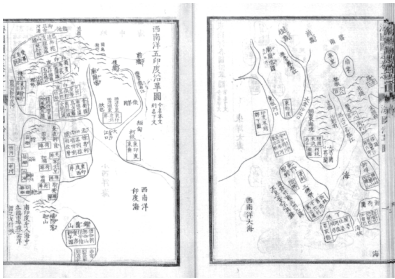


図3 海国沿革図

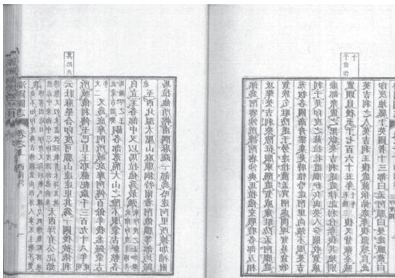


図4 海国図志印度国部

を校訂し、訓点を付す(図4)。上巻の冒頭に頼の「印度国志を刻する序」、家長政惇(頼山陽の弟子)の「印度国志を翻刻するの序」がある。目次の最後に「嗣刻(予定刊行)目録」として、「一中国西洋紀年通表 頼惇補 一 南洋西洋各国教門表 一 中国西洋曆法異同表 一 海国図志序論叢 頼惇輯」とあるが、頼は安政六(1859)年に安政の大獄で刑死したため、いずれも刊行されなかったようである。

頼子春は、頼山陽の三男、頼三樹三郎である。尊皇攘夷の志を抱き、安政の大獄に座し、処刑された幕末の志士である。彼は「印度国志を刻するの序」で「蓋し印度は地球の中に処り、四通八達し、運転自在。英吉利の歐羅巴の大国と称し、其の富強に致す所以の如き者は以てその拠るに印度有ればなり。(原文は漢文)」と言い、印度が地球の中心にあり、四通八達の地であり、英国が豊になりヨーロッパの大国になったのは、正しく印度が地政学的に要地であるからと指摘し、「苟も外国に意を用ひ、予防(侵略を防ぐ)の述を講ぜんとする者は此の部(印度国部)を読み、以て土地の形勢の在る所と敵国の利害の係る所とを諳んずれば、則ち能く立ちどころに万国の威と折衝せん(原文は漢文)」と述べ、今後日本が列強に伍して行くには、この「印度国部」を読むべきだと、『海国図志』の中で、「印度国部」を翻刻する意義を述べている。また、序文を書いた、家長政惇も魏源はア

頼子春は、頼山陽の三男、頼三

『海国図志』と日本 その2—和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について—

ヘン戦争の敗北に当たり、憂国の念を抱き、『海国図志』を著したとし、また「黙深（魏源）、武（孫武）の遺意（戦うには相手のことを理解することが先決である）を得、以て此の書を作る。而して其の慮、武を過ること遠し、何なれば則ち孫武の籌する所、七国を出でず、黙深は則ち広く五大州に及ぶ。読者苟も此の書を得れば、近きの以て彼を知り、己に備うべく、遠きの五洲万国に図るべし（原文は漢文）」と『海国図志』の意義を西欧列強と渡り合う為の必読の書とし、更に「其の枢要は印度に在り」とし、今回、頼三樹三郎が刊行する印度国志の扱う印度を、世界の枢要の地とみた、頼の見識の高さを讃えている。

頼のような、攘夷派志士でも、既に述べたように、夷情（外国事情）に通じることにかけており、この点は日本の近代における世界事情の受容の大きな特徴である。

7 鶴嶺道人『海国図志 国地総論』一卷一冊 明治二（1869）年【早稲田大学付属図書館所蔵】

巻46巻「国地総論上」を校訂しそれに訓点を付し、地名等にカタカナでルビを付す。数は多くないが、校訂の結果は上の欄外に記してある。

巻頭に作者の自叙がある。その「叙」に拠れば、西洋の地球説に反発して、魏源が西洋の地球説に反論した『海国図志』巻四十六「国地総論上」を和刻本で刊行したようである。他の『海国図志』の和刻本とその刊行動機は全く異なる。校訂者名は筆名であり、その人物については不明。

以上、『海国図志』の和刻本七点をその内容について述べてきた。これから和刻本全体の特徴を述べることにする。ただし和刻本7「国地総論」は他の和刻本と全く性格を異にするので、ここでは論じない。

まず、その点数は、他の、日本に将来した海外の情報（夷情）を扱っ

た書物の和刻本、例えば『地理全志』、『大美連邦志略』などと比べると多いが、それらの和刻本は完本であって一点出版されればそれで十分である。『海国図志』の和刻本には完本がなく、いずれも抄本であれば点数が決して多いとは言えない。そもそも和刻本は和解本に比べ大部のものが多く、その出版には和刻本の底本となる原本確保、膨大な出版費用、高度な漢籍に対する学識を有する校訂者が求められ、点数が少ないのも十分に理由があることである。

次に、和刻本は実際に『海国図志』のどの部分を和刻したのであろうか。既に述べたように『海国図志』和刻本には、完本は一つもない。どの和刻本もその抄本である。地域で言えば、「亜墨利加洲（アメリカ洲）部」、「俄羅斯国（ロシア国）部」、「普魯社（プロシア）国」、「英吉利国（イギリス）部」と「印度国部」である。「普魯社（プロシア）部」は『海国図志』の地域分けでは「俄羅斯国（ロシア国）部」と同じ「北洋」であり、ロシアと一連のものとして和刻されたものと考えるのが妥当である。その上で、和刻本で扱われた国を見ると、どこも和刻本出版当時日本に強弱に差があるものの、開国を求めてきた国々か、その国に植民地とされた国である。即ち日本が国防上、外交上相手国の事情を十分に知るべき国々である。部門で言えば、「籌海篇」、「夷情備采」、「火輪船図説」であるが、列強の事情を知り、海から進入する敵を撃退する海防の方法や列強の利器を知る諸篇である。つまり、和刻本として出版された諸本は皆出版当時、日本にとって国防上、外交上重要であり、かつ脅威となっていた国々の事情や海防に関するものであった。

次に和刻本の読者層であるが、原文に訓点を付し、地名等に一部ルビを付するという和刻本の形態から、かなりの漢文リテラシーを有した者に限られ、普及という点では和解本には大いに及ばない。ただ、次に論ずる和解本の底本になった可能性も大きく、『海国図志』をより多くの

『海国図志』と日本 その2一和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について一

人々に提供する役割はその点に於いて十分に果たしたであろう。幕末に『海国図志』を読んだ代表的な知識人佐久間象山、横井小楠、橋本左内、吉田松陰などはいずれもこの和刻本乃至その写本で読んでいる。

(2) 和解本

和解本は、和語に解された本であるが、その書物としての形態は、先に述べた和刻本と異なり、多様である。単に原文を忠実に訓読して書き下し文にした本から、原文の語を一部わかりやすい表現に改めるなどして原文を意識した、今で言う翻訳に近い本まである。またルビの付け方でも、人名、地名にさえ必要最低限度しか付けられない本もあれば、全ての漢字にルビを付け、更に漢字の意味をルビで左側につける本もある。

和解本は全部で14点あるが、和刻本と同様の原則で並べ、筆者の実地調査に基づき、1 作者名（和解をした者の氏名）、2 書名、3 巻数、冊数、4 出版時期、5 出版元、6 筆者が調査に用いた本の所蔵先、7 底本『海国図志』第二版六十巻本での巻数、編名を記すともに、更にその書物としての形態から予想される読者層、叙、跋等に拠る出版意図についても述べることにする。

- 1 A 正木篤『美理哥国総記和解 全』一卷一冊 嘉永七（1854）年*
【筆者所蔵】
 - B 正木篤『美理哥国総記和解』上中下三冊（嘉永七（1854）年八月出版許可）【国立国会図書館所蔵】
- * 序の執筆時期（嘉永七年甲寅初夏【四月】上澣）、跋の執筆時期（嘉永七年甲寅孟夏月【四月】）

Aは巻三十九「弥利堅国総記上」のほぼ半分の原文を平仮名交じり

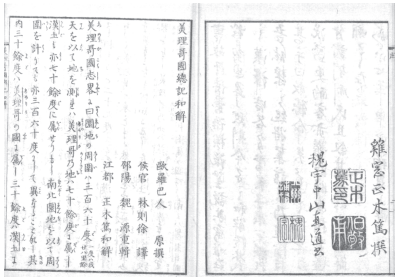


図5 美理哥国総記和解

に書き下し、原文のわかりにくい語、例えば「中国」を「漢土^{から}」に換えたり、文の理解のために、語を補ったり、漢字には全てその語の右側に平仮名でルビを付す。原文の中国の年号は割り注で日本の年号を示す。一部の漢字にはその意味を平仮名でその語の左側に付す。地名は右側に傍線が引いてある (図5)。

Bは、上冊は表紙がAと同じ黄色、収録部分もAと全く同じであり、中冊は表紙が薄水色で格子模様が押されている。上冊の巻三十九「弥利堅国総記上」の続きから始まり、その終わり(注として引く、高理文〔ブリッジマン〕の原志序)まで収録する。下冊は表紙が中冊と同じ。巻三十九「弥利堅国総記下」を全部収録する。和解の方法はAと全く同じである。

AとBとの関係であるが、Aは題簽が「美理哥国総記和解全」となっておりその終わりに「大尾」とあり、それ自身単独に刊行されたものであろう。少なくともAの刊行時には、その後の部分まで訳すつもりはなかったようである。しかし、後に続きの文の和解を始め、改めてAも含めた形で刊行したと見るのが自然であろう。なおBの上冊の題簽は「美理哥国総記和解 上」となっている。

実際に、図書館での所蔵状況を見ると、『美理哥国総記和解 全』一冊のみを所蔵している図書館と、『美理哥国総記和解』上中下三冊を所蔵している図書館に分かれており、このことはその刊行事情を反映しているではなかろうか。

Aは巻頭に、Bは上冊巻頭に正木の自序があり、Aは巻末に、Bは上

『海国図志』と日本 その2一和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について一

冊巻末に杉本達の跋がある。

正木篤は、自序「美理哥国総記和解序」で、「清魏源重輯『海国図志』若干巻、中に各国総記有り。実に歐羅巴人原撰にして、林則徐訳する所に係わるなり。嘗てその記載する所は、洋国の政治、風俗、以て及び其の巧芸、布帛、飛潜、動植の微、皆臚列して之を掲ぐ。故に洋国の概を知らんと欲せば、以て証を取るに足らん。…頃余亜墨理加総記一書を獲、舌耕の余暇、竊かに訳するに国字を以てし、既に成る（原文は漢文）」と述べ、『海国図志』が洋国（欧米）の事情を知るのに有用で、それが故に仕事の合間に和解したことが示されている。

和解本3から6までの作者正木篤（仙八）は名篤、号鷄窓、江戸在住の浪人儒者であり、漢詩に巧みであった（「市中取締続類集 書物」、『国書人名辞典』（岩波書店、1993～1999年））。

2 正木篤『澳門月報和解』一巻一冊 嘉永七（1854）年（『市中取締続類集』記載なし）【国際日本文化研究センター所蔵】

巻五十一「夷情備采上 澳門月報」の原文を和解する。この和解の仕方は和解本1と同じである。巻頭に正木の序文がある。

3 正木篤『墨利加（アメリカ）洲沿革総説総記補輯和解』一冊 安政二（1855）年正月（同年同月許可）【国際日本文化研究センター図書館所蔵】

巻三十九「外大西洋墨利加洲総叙」、「墨利加洲沿革総説」、「弥利堅国総記補輯」の原文を和解する。和解の仕方は和解本1、2と同じである。和解本1に収録されていない諸編が収録され、和解本1を補うものとし

て刊行されたのであろう。巻頭に正木の自序があり、巻末に、正木の「火輪車図に題す」と、「火輪車一に火煙車と曰ふ」と言う彩色の蒸気機関車の図がある。

4 正木篤『英吉利国総記和解』一卷一冊 安政二（1855）年正月（同年同月許可）【国際日本文化研究センター図書館所蔵】

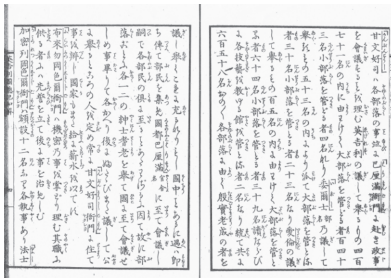


図6 英吉利国総記和解

卷三十三「英吉利国総記」の原文を和解する。和解の仕方は和解本1、2、3と同じである。本書には、冒頭英語を中国語に音訳した官職、機関を表す語が多いが、そのルビは、作者に洋学の素養があまりないためか、例えば、

下院（common house）を表す「甘文好司」に漢字音をそのまま宛てて「かんぶんこうし」とふるようなケースが多い（図6）。既に見たように、塩谷、箕作の『海国図志 英吉利国』の同じ部分と比べれば、その出来の差は歴然としている。

巻頭に正木の序、巻末に杉本達の跋「英吉利国総記を跋す」がある。正木は自序で「郷に余『美理哥国総記』を訳し、既に成る。又『英吉利総記』一書を獲、乃ち謂ふ、^{ちいさ}叢きかな、此の挙。以て不朽に垂るるに足らざるを、と。…訳するに国字を以てす（原文は漢文）」と和解の発端を述べ、アメリカ、ロシアも本質的には「虎狼の類」である点は変わりがない、イギリスは更に強悍狡黠であるが、こちらに間隙がなければ畏れるに足らないと言い、イギリスの事情を十分に知らしめんとする本書出版の意義を述べている。また、杉本達は跋で「今、夫の英夷外蕃中

在りて、最も梟雄にして畏るべきの邦為り。然らば、則ち我が武夫俗吏なる者彼の風土、美悪、地勢、利害、政刑、民俗の得失、詳かにせざるべからざるは、其れ情状なり」「近時我が国海警有り、大いに士気を振るい武備を周修して以て緩急の用に供せんとせば、則ち我が武夫、俗士、彼の風土人情に詳かにせざるをえざるは其れ情状なり。伯敬（正木篤）…和解に専念し、読者をして一覽し、其の大概を知らしむるは蓋し時務に切なり。豈に浅鮮ならんや（原文は漢文）」と言い、この和解の出版目的を夷狄中最も凶悪なイギリスに対抗するために彼の風土人情を知らしめるためと述べ、読者対象を「我が武夫、俗吏」としている。

5 広瀬達『亜米利加総記』一卷一冊 嘉永七（1854）年甲寅初夏（同年七月許可）【文教大学越谷図書館所蔵】

卷三十九「弥利堅国総記」上のほぼ半分を和解する。

広瀬達の和解は単なる訓読とは異なり、読み手がわかりやすいように訳されており、今で言う翻訳に近い。次にその例として、冒頭の一部を原文と和解文で対照してみる

原文 〔美理哥国志略〕曰、圜地周囲三百六十度、以天測地、則美理哥地属七十余度、中国亦属七十余度、若以南北圜地而計、周囲亦三百六十度。内三十余度属美理哥国、三十余度属中国。中国之京城與北極相去不過五十度、而美理哥国之都城與北極相去亦不過五十二度。

和解文 ^{アメリカ}亜米利加国志略曰全地球ノ周囲三百六十度ナリ天ノ度ヲ以テ地ヲ測量スレハ^{アメリカ}亜米利加ノ地ハ七十余度ニ属ス支那モ亦七十余度ニ属ス。若シ地球南北ノ圜地ヲ以テ計レハ周囲モ亦三百六十度ソノ内三十余度^{アメリカ}ハ亜米利加国ニ属シ三十余度ハ支那ニ属ス支那ノ京城北極ヲ

相ヒ去ルコト五十度ニ過キス^{アメリカ}亜米利加ノ都城モ亦北極ト相ヒ去ルコト
五十二度ニ過キス。

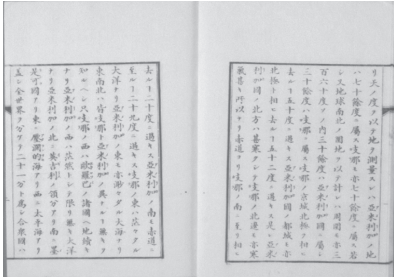


図7 亜米利加総記

原文の「中国」を「支那」に、「美
理哥国」を「亜米利加」と、読者
にわかりやすい語に換え、また、
「圜地周囲三百六十度、以天測地」
のように、原文を訓読しただけで
はわかりにくいところを、「全地
球ノ周囲三百六十度ナリ天ノ度ヲ

以テ地ヲ測量スレハ」と言葉も補って、漢字片仮名交じりで訓読調に訳している。中国の年号は日本の年号に改め、地名などには必要に応じて片仮名のルビが付き、一部の漢字には左側に意味を片仮名で記し、読者が理解しやすいように心がけている。読者を他の和解本の作者同様「武夫」にまで想定していることは間違えない。(図7)。

巻頭に藤森大雅の「重訳美利哥総記の序」があり、続けて作者広瀬達の「亜米利加総記叙」があり、巻末に横山湖山の跋文がある。

広瀬の叙では、「今の夷狄は古の夷狄に非ざるなり。而して世人察せず、傲然として之を軽視し、以て意と為さず。或るひは具に粗ば其の情勢を知る者は爾然として恐怖の心を生じ、備えを為す所以を知らず。夫れ能く人をして彼の情勢を審らかにし、畏るべくして怖るべからざるを知らしむるは、読書人の任なり。…故に余図志中に就き国字を以て弥利堅総記を訳し、世人をして彼の情勢の畏るべく怖るべかざるを知り、之が備えを為さしむ(原文は漢文)」と言って、世の人にアメリカの実情を理解させ、それに備えられることを和解出版の意図であると述べている。

広瀬は更に、本文の冒頭で「此書(『亜米利加総記』)ハ歐羅巴人ノ

『海国図志』と日本 その2一和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について一

原撰ニシテ清ノ林則徐ノ翻譯ナリシヲ其後魏源^{かさね}重子テ輯録セシ海国図志ト云フ書二本ツケリ。原書ニハ清朝ノ年号ヲ用ユ今替ユルニ皇朝ノ年号ヲ用ユルモノハ覽ル者ニ便ナラシメンカ為ナリ」と記し、書物の来歴と、既に指摘したように、原文の年号の和解の方法を説明している。

藤森大雅は「余、嘗て之（アメリカ独立戦争）を聞き、深く其の禦侮の要を得るを嘉せり。然れども世の西書を訳す者は彼此の語勢異なるあるを察せず。原文辞儀儻なるに過泥し、読者をして悶々とせしむ。…広瀬可行更に邦語を用いて之を重訳す、通暢平正にして当日の事情において炳然として火を觀るが如し。武夫之を読むと雖も、亦た通曉すべし。夫れ人をして禦侮の要を通曉せしめるは、当世の急務なり」（「重訳美利哥総記の序、（原文は漢文）」）と言い、本書の和解が「通暢平正」と褒め、本書の読者対象を「武夫」としている。

作者広瀬達は名可行、字達、号竹庵、蘭学者で稲葉長門守（正邦）山城淀藩家来を経て、高松藩藩儒、藩校講道館洋学教授（『市中取締統類集 書物』、『国書人名辞典』（岩波書店、1993～1999年））。

序文を書いた、藤森大雅（1799～1862）は、名を弘庵と言ひ、儒者で小野藩侍講、土浦藩藩校教授を経て、江戸で塾を開く。勤王の志士と交わり、「海防備論」を著し、安政の大獄では江戸追放処分となる（『講談社日本人名大辞典』、2001年）。

跋文の横山（小野）湖山（1814～1910）は明治期まで活躍した著名な漢詩人。梁川星巖、藤森弘庵に師事し、藤田幽谷と交わり、安政の大獄で蟄居処分を受ける（『講談社日本人名大辞典』、2001年）。

- 6 広瀬達『続亜米利加総記』二卷二冊 嘉永七（1854）年甲寅閏（七）月（同年九月許可）【東京都立中央図書館所蔵】

一冊目は、「(外大西洋) 墨利加洲総叙」に始まり、次に高理文（ブリッジマン）「『四洲志』原志序」（卷三十九「弥利堅国総記」上の最後の部分）が続く。それらに訓点を付し、地名には片仮名でルビを付す。その次に、巻一が始まり、和刻本9『亜米利加総記』に収録した「弥利堅国総記」上の続きから、その最後までを、巻二は「弥利堅国総記」下を収め、それを和解する。和解の仕方は和刻本5と同じである。一部の漢字にも必要に応じて、「棉花」に意味として片仮名「ワタ」を字の左側に振り、「衙門」に読みとして片仮名「カモン」を字の右側に振り、意味として片仮名「ヤクショ」を字の左側に振る。序も跋もない。

7 広瀬達『亜米利加総記後編』三卷二冊 安政二（1855）年初夏（同年正月許可）【千葉県立中央図書館所蔵】

一冊目は巻頭に本書目次があり、巻一卷には四十「弥利堅国東路二十部」前半が収められている。二冊目は、巻二には、巻四十後半、巻三には巻四十一「弥利堅国西路十一部」が収められている。和解の仕方は、和解本5、6と同様である。序、跋ともにない。

8 大槻禎『海国図志夷情備采』一卷一冊 嘉永七（1854）年甲寅仲秋（叙の日付は嘉永甲寅初冬上浣、『市中取締続類集』記載なし）【国際日本文化研究センター図書館所蔵】

巻五十一「夷情備采 上（澳門月報一～五）」の概ね原文に忠実な、片仮名交じりの書き下し文である。地名等にはカタカナでルビを付す。

叙には、「海防の道は夷情を知るよりも要なるはなし。夷情を知らば、則ち強弱の勢、審らかにし勝敗の機決す。…「夷情備采」なるは清人魏

『海国図志』と日本 その2一和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について一

黙深の『海国図志』中に輯むる所にして、分かちて上下両巻と為す。…海外各国の夷情を叙して、未だ此の書の如き詳悉なる者有らざるなり、因りて訳して栞行す。辺疆の責に任ずる者は之を熟読しその情を得ば、則ち戦ふに以てその鋭を挫き、款するに以てその命を制さん。…（原文は漢文）」とあり、その出版意図を「辺疆の責に任ずる者」に「夷情を知」らしめるためという。

大槻禎（1818～1857）は、即ち大槻瑞卿である。仙台藩儒者で、父は大槻清臣であり、昌平坂学問所に学び、幕末、異国船来航し外交論が高まると、洋学者の著訳書を参考に『海国図志仏蘭西総記』『西洋新史』『外蕃通表』『遠西紀略』『^{ボナバルト}卜那肥盧的紀略』などを著わし、各国史や世界地理を紹介して海防論を説いた（『講談社日本人名大辞典』）。

9 大槻禎『海国図志俄羅斯総記』一卷一冊 嘉永七（1854）年甲寅仲秋（安政二年正月許可）【早稲田大学付属図書館所蔵】

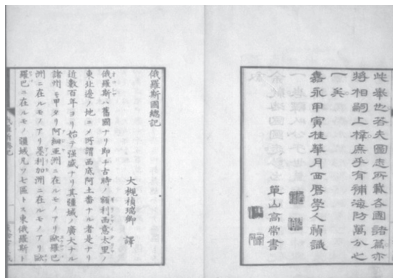


図8 海国図志俄羅斯総記

卷三十六「俄羅斯国総記」の概ね原文に忠実な片仮名交じりの書き下し文である。地名等にはカタカナでルビを付す。大槻の叙があり、日付は「嘉永甲寅桂華の月（八月）」とある。（図8）

叙に「蓋し俄羅斯、坤輿の中に在りて雄大の邦と称し、北方、我が蝦夷と僅かに一衣帯水を隔つのみ。その形勢情状詳にせざるべからざるなり。此の巻其の国事を詳叙し、之を読めば發明する所多し（原文は漢文）」と言い、北方を接しているロシアへの備えとして、「俄羅斯総記」を読む意義を述べ、更に「独り武

夫俗吏の邊かに解すること能はざるを惜む。此の挙有る所以なり（原文は漢文）」と、「武夫俗吏」にでも読めるように、訓読、ルビ付きの文にしたと言う。このように、和解本の出版意図を述べ、その出版が和刻本の他の作者同様、日本が夷狄（欧米列強）と渡り合うための貴重な文献の提供であると考えており、さらにそれに加えて、「武夫俗吏」にも読めるようにとの配慮がある。このような読者への配慮は他の和解本にも共通しているように思われる。

- 10 大槻禎『海国図志仏蘭西総記』一卷一冊 安政二（1855）年乙卯 孟夏（『市中取締続類集』記載なし）【早稲田大学附属図書館所蔵】

卷二十七「仏蘭西国総記」、「仏蘭西国沿革」の原文を概ね忠実に、片仮名交じりで書き下しにする。地名などの固有名詞のみならず、漢字には全てカタカナでルビを付す。叙、跋ともにない。

- 11 皇国隠士『新国図志通解』四冊 嘉永七（1854）年*（『市中取締続類集』記載なし）【国際日本文化研究センター図書館所蔵】

*本書には出版時期がどこにも明記されていない。鮎沢氏は前掲書で冒頭にある『（職方）外紀』の作者割り注の「今嘉永七年を距たること…」によって、嘉永七年の出版としているので、ここではそれを出版時期として示す。

新国とは弥利堅国（アメリカ合衆国）のことであり、卷三十九「外大洋墨利加洲沿革総説」、「弥利堅総記上」、「弥利堅総説下」を原文に即して平仮名交じりの書き下し文にしている。原文に登場する書名等には割り注で解説を付け、漢字には全て片仮名でルビが付けられている。中国

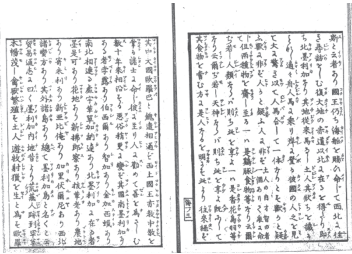


図9 新国図志通解

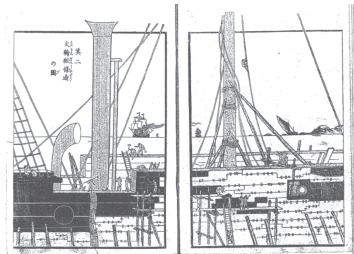


図10 新国図志通解の図版

の年号は割り注で、それに相当する日本の年号を示す（図9）。原文にない図版を十数点付す（図10）。

序、跋はともにない。但し、巻頭の凡例に、「前ニ刊刻スル所ノ海国図志ハ亜墨利加洲ノ古今沿革、彼ノ国ノ風俗人情ヲ察ルニ此書ニ如ハナシ、サレトモ、漢ト蛮ト字音ニ花地ヲフロリダ農地ヲブラドル雪際亜ヲスウエシヤ閩龍コロンビユス白鐵ブリッキ等ノ如キ大ナル差ヒ多キ故ニ、洋学不辨ノ人ハ読ニ倦ム、因テ国字ヲ以テ之ヲ解ス」と、通解した『海国図志』の該当箇所（アメリカ合衆国）がアメリカの沿革、その風俗、人情を知るに格好の書物であること、更に国字で訳しているのが洋学に知識がない人も読みやすいこと、即ちこの和解本出版の意義を述べ、「原本ハ歐羅巴人ノ撰述、大清林則徐ノ訳本ナルガ故ニ、其年ヲ記スニ彼国ノ年数ヲ中華ノ号ニ配ス、今亦諸書ヲ校訂シ、異同ヲ挙げ我国ノ年号、画図ヲ添テ読者ノ助トナス」と年号を日本の年号に直すなど、即ち通解の工夫を述べている。

参考 皇国隠士『西洋新墨誌』四卷二冊 明治十三（1880）年 東洋館【国立国会図書館所蔵】

本文、図版ともに和解本1と全く同じであり、違うのは書名と、和解本1が四冊、本書が二冊という冊数だけである。⁽¹²⁾

12 小野元濟『英吉利広述』二卷二冊 安政二（1855）年正月（安政二年正月許可）【筆者所蔵】

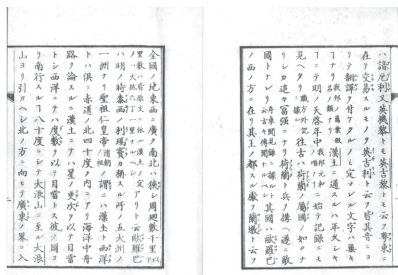


図11 英吉利広述

卷三十五「英吉利国広述」を、原文に忠実には訓読せず、読者が読みやすいように原文の語をわかりやすい語に、例えば「貿易」を「交易」に置き換え、片仮名交じりの訓読調に訳している。地名、人名にはカタカナでルビが付いている

ものもあり、難解と思われる語には語の左側に意味をカタカナで記し、中国の元号には、それに相応する日本の元号が割り注で示してある（図11）。

巻頭に、横山（小野）湖山の序があり、小野には序がないが、第一巻の最初に「此書ハ清ノ林氏則徐カ原撰ニシテ魏氏源カ重輯セル海国図志中ノ一卷ナリ、但シ原撰ニハ見エス全ク魏氏ノ補フ所ナリ、故ニ多ク清朝ニ関スル事ヲ記セリ、然レドモ之ニ就テ考フレハ、其国ノ形勢事情ミナ了然トシテ見ルベシ、是余カ抄出スル所以ナリ」と記し、「英吉利国広述」を訳した意図を述べている。

作者小野元濟は稲葉長門守（正邦）山城淀藩家来である（「市中取締続類集 書物」）。

13 服部静遠『海国図志訓訳(攻船水雷図説)』上下二冊 安政二(1855)年六月(『市中取締続類集』記載なし)【国際日本文化研究センター図書館所蔵】

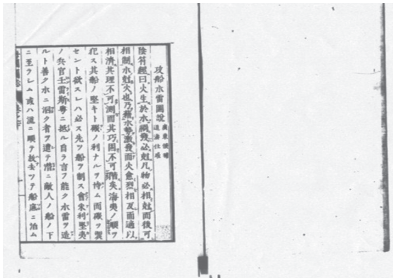


図12 海国図志訓訳

卷五十六「西洋礮台図説」、**「礮台旁設重険説」**、卷五十七「仿造西洋火薬法」、卷五十八「攻船水雷図説」を片仮名交じりの書き下し文にし（図12）、図を付す。巻頭に頼惇（頼三樹三郎）の序「『海国図志』を刻するの序」がある。

目次の最後に今後刊行予定書目がある。

作者服部棟隆は、経歴を知る手懸かりが、頼惇の序文しかなく、その序文に拠ると、崎陽（長崎）在住であること、翁と読んでいたので、高齢であることしかわからない。

- 14 南洋梯謙『海国図志籌海篇訳解』三卷三冊 安政二（1855）年十二月＊（『市中取締続類集』記載なし）【東京都立中央図書館所蔵】

＊序文の執筆時期。

卷二卷一は、『海国図志』冒頭にある魏源の「『海国図志』叙」、『海国図志』六十卷本の総目次、卷一「籌海編一 議守上」を読者が読みやすくするために訳語を補い、漢字片仮名交じり文で訓読調に訳し、地名等に片仮名でルビを付す。

卷二は卷一「籌海篇一 議守上」の残りの部分、卷一「籌海篇二 議守下」、卷二「籌海篇三 議戦」の前半を卷一と同様の方法で訳す。卷三は卷二「籌海篇三 議戦」の後半、卷二「籌海篇四 議款」を卷一と同様の方法で訳す。

巻頭に南洋梯謙の自序がある。その序には「其の記載する所の籌海篇は其の要を掲げ、謂う、水陸戦法を異とし、器械も亦た随変す。惟だ巨

艦大礮の尚、洋夷英、仏、俄羅、弥利の別有りと雖も器械に至っては則ち同じく艦と礮とに在り。…余始めて魏氏の言、誣ならざるを信ず。おもへらく、此れ天下の武夫必読の書なり、と。当に博く施し以て国家の用為るべし。此れ訳解の挙の由りて起きる所なり。抑も之を水手輩に施さんと欲す。高明君子の覧に供するにあらざるなり（原文は漢文）」と、和解した籌海篇を「天下の武夫必読の書」と言い、このような訳解を行ったのは、「水手輩」に読ませるためだと出版意図を述べている。

なお、筆者は今回『海国図志』和刻本、和解本の調査を行う過程で、東京都立中央図書館で特別買上文庫（和書）の中に、和解本の稿本、井口正徳訳『海国図志籌海篇訳言』（有吉原監旧蔵、後に中山久四郎の所有に帰し、現在特別買上文庫所蔵）を発見した。詳細は調査中であるので、ここに記すだけとする。

以上和解本を本ごとにその内容、書物の形態及び作者の出版意図を述べてきた。これから和解本全体の傾向について述べていきたい。

まず、和解本は『海国図志』のどの部分を和解したのだろうか。地域、国別で言えば、亜墨利加洲（アメリカ大陸）、美理哥国（アメリカ合衆国）英吉利（イギリス）国、俄羅斯（ロシア）国、仏蘭西（フランス）国であり、和刻本より仏蘭西（フランス）国が一つ増えているだけである。点数で言えば、アメリカが断然トップで6点であり、続いてイギリスが2点で他はそれぞれ1点である。これらの国々はいずれも日本周辺に勢力を張る列強である。アメリカが多いのは、アメリカが当時日本に欧米列強の中で最も強硬に開国を求め、それを実現した国であり、日本人の関心がもっと高かった国だからである。

部門別では、「籌海篇（海防）」、「夷情備采上澳門月報（外国事情）」、「砲台」、「火薬」、「水雷」（西洋の武器）である。いずれも出版当時、日本にとって国防上重要である海防、西洋の武器、外交上重要である夷情（外国事情）

であった。つまり、和解本の諸本は和刻本同様、既にそれぞれの叙、跋から見てきたように、当時の日本人が欧米列強に対抗する為の情報、但しこれは単なる地理知識ではなく、その国の古今沿革、風俗人情など多面的事情であるが、それを『海国図志』の中から選び出し、和解、出版したものであった。

また、出版時期は嘉永七年が6点、安政元年が1点、安政二年が7点である。安政元年は僅か一ヶ月ほどしかなかったので1点と少ないのは当然であるが、ペリーが来航し、日米和親条約が締結された嘉永七年に6点、実際上翌年に当たる安政二年は7点である。正しく、日本を巡る、国際情勢の進展と出版点数は関連していると言えよう。それ以後は一点も出版がないが、それは『海国図志』の中の、日本で必要とされる部分が既に皆出版されていたからであろう。

次に書物として形態であるが、和解本は漢字仮名交じりの文で記された一種の「翻訳」である。作者は程度の差こそあれ、読者が読みやすいように心がけ工夫している。地名、人名などにルビを振ることはもちろん、既に見てきた和解本諸本には漢字全てにルビを振り、更に漢字の意味までもルビで振るものもあり、その場合自学自習も可能である。それは、多くの作者が序、跋で言うように漢文リテラシーが心許ない「武夫」、
「俗吏」にも、夷に対抗するには、夷情、即ち日本に迫り来る列強の事情を認識させようとしたからである。和刻本がかなりの漢文リテラシーを有した武士を読者と設定していたのと大いに異なるところである。

『海国図志』が幕末多くの人に読まれたのは、まずはその内容が当時の人々の求めるものに一致していたからであろうが、以上挙げた和解本の訳の形態によるところも大きかったからではなかろうか。

既に触れたように、和解本の作者の出版意図はその序、跋に拠ってみれば、夷狄（欧米列強）に対抗する為に、夷情（欧米の事情）を知るこ

とにある。これは当時即ち幕末の知識人のごく普通の対応であった。夷狄がどんなに貪欲、狡猾な連中でも、実際ここに取り上げた諸本の序、跋で見る限り、当時の日本の知識人は夷狄をそのように認識していたようだが、それでも夷情（欧米の事情）を知ろうとした。このような対応は中国でのそれと全く異なる。中国では夷情（欧米の事情）を知ろうとしなかったのである。この夷狄への対応の違いは日中両国の近代を正反対のものにするが、この問題を考えるには、中国における華夷思想の問題、日本では江戸時代における日本の思想的展開（華夷的世界観からの離脱等）とも関連し問題が複雑であり熟考を要するので、ここでは指摘するにとどめたい。

また、既に和解本の序、跋に拠れば、和解本の作者は夷狄に対抗する為に、「武夫」、「俗吏」にも夷情を理解させようとする。和解本の作者たちのこのような考えの背景には、所謂「処士横議」、志士たちが藩を越えて結びつき、力となって国論形成に与るという、幕末の時代状況と大いに関係があると思うが、上記の問題と共にここでは指摘にとどめておく。

3 結び

以上『海国図志』の和刻本、和解本の諸本を一通り見てきた。和刻本であろうが、和解本であろうが、『海国図志』のどの地域、国から選び、どの部門から選んだかはいずれも同じ傾向であった。即ち地域、国別では日本に開国、通商を求めてきた欧米列強であり、部門別では海防、外国事情、西洋の武器に関する篇であった。また出版時期であるが、嘉永七年、安政二年に集中していた。また、これまで研究に於いてほとんど関心を持たれなかった和解本であるが、その作者はリテラシーがあまり高くない読者「武夫」、「俗吏」にも配慮して本作りをした。以上の点か

ら、日本刊行『海国図志』の諸本は作者の側から見ると、幕末に日本が置かれた困難な状況、即ち日本が欧米列強からの武力を背景とした開国、通商要求に、早急の対応に迫られていた状況の中で、それに対処しようとして出版されたことが判る。それ故に、この『海国図志』の諸本は幕末日本において時宜を得た書物として多くの読者を獲得するにいたったのであろう。今回はもっぱら書物をつくる側から、日本刊行『海国図志』の諸本を論じてきたが、今後は書物を読む側、即ち読者の側からもこれら諸本を論じ、幕末における西洋事情受容の状況を更に一步進んで考えていきたい。

注

- (1) 平石直昭『改訂版 日本政治思想史—近世を中心に』第14章「西欧の衝撃と日本の海国」（放送大学教育振興会 2001年）p.148。
- (2) 筆者は、日本における『海国図志』の諸本の調査をするに当たり、まず京都大学東アジア人文情報学研究センターの漢籍データベース、国内主要大学、研究機関の漢籍目録、国文学資料館の日本古典籍総合目録などを諸本の所在調査の手懸かりとした。日本古典籍総合目録を使用したのは、和解本は、『海国図志』の原文が収録されていないために、漢籍ではなく和本として扱われることが多いからである。そのようにして、諸本の所蔵機関の調査を行った上で、まず東京大学東洋文化研究所、東洋文庫、国立国会図書館、東京都立中央図書館をはじめとする近隣の諸本の所蔵図書館を訪れ調査するとともに、更に足を京都に延ばし、京都大学東アジア人文情報学研究センター図書室、国際日本文化研究センター附属図書館を訪ね、調査した。殊に国際日本文化研究センター附属図書館は、本稿で言う、和解本のかかなりの部分が所蔵されており、

更にその内の半数以上がマイクロフィルム化されており、短時間で効率よく調査ができた。今回ここに挙げた日本刊行『海国図志』の諸本のデータは、大半は筆者の調査に基づいているが、僅かに鮎沢氏の前掲書に拠り補ったところがある。その場合はその旨を記す。

- (3) 誤認の中で最大ものは、『四洲志』の藍本、『世界地理大全 (The Encyclopedia of Geography 1834年)』の著者は慕瑞 (Hugh Murray) であるが、それを『四洲志』の序文を書いた来華宣教師ブリッジマンと誤認している点である。また、これはそれに比べれば小さな誤認ではあるが、広瀬達『亜墨利加総記後編』には跋文がないのに、同『亜墨利加総記』の横山湖南の跋と混同して、その跋があるとしている点である。(『鎖国時代日本人の海外知識』「世界地理の部 四 幕末開国期に伝来した唐本世界地理書の翻刻と邦訳」 p.136 ~ 137, 145)
- (4) 「『海国図志』と日本」(『言語と文化』第23号)では、和刻本(訓点本)6点、和刻本17点の総計23点としたが、今回それを再検討した結果、和刻本7点、和解本14点の総計21とした。それは以下の理由による。まず和刻本に数えていた『海国図志国地総論』を詳細に調査した結果、本文を校訂し訓点を付した本であることが判明し、和刻本に分類した。これまで、2点と数えていた『美理哥国総記和解 全』(一卷一冊)と『美理哥国総記和解』(上中下三冊)を前者が後者の一部であるので1点と数え、『西洋新墨誌』は『新国図志通解』の海賊版であるので和解本から削除した。
- (5) 石山洋「箕作阮甫の地理学 六 漢籍地理書の校註」p.234(『箕作阮甫の研究』思文閣出版 1978年)によれば、『海国図志』諸本の出版許可申請の記録が全部ではないが、旧幕引継文書『市中取

締続類集』「書籍」(国会国立図書館所蔵)に残っている。石山洋氏は論文にそれを用いている。筆者も国立国会図書館でそのマイクロフィルムを見て確認した上で、出版許可時期、出版申請者の身分の資料として本稿に用いた。

- (6) 海野一隆『日本古地図集成 世界図編』解説「4 蘭学系世界地図 97 海国図志弥利堅国図(内題 弥理堅新図)」(講談社、1975年) p.67
- (7) 『茶顛翁中山元成事跡の一端』(筑西郷土文化財保存会、1964年)
- (8) 大庭脩『漢籍輸入の文化史』(研文出版、1997年) p.326
- (9) 宮地正人「幕末・明治前期における歴史認識の構造」(『歴史認識 日本近代思想大系』、岩波書店、1991年) p.514 ~ 515
- (10) 川田貞夫『川路聖謨』(「人物叢書」、吉川弘文館、1999年) p.227
- (11) 前掲書p.227
- (12) 国際日本文化研究センター所蔵本『新国志通釈』と、国立国会図書館近代ライブラリの電子データ『西洋新墨誌』とを全編にわたり比較検討した結果である。

補注

本稿の図は、図1、5、11は筆者所蔵本を、図2は国立国会図書館所蔵本(マイクロフィルム)を、図3、4、7は文教大学越谷図書館所蔵本を、図6、9、10、12は国際日本文化研究センター附属図書館所蔵本(マイクロフィルム)を、図8は早稲田大学附属図書館所蔵本(古典籍総合データベース)を用いた。

付記

和解本の叙、跋には草書体で読みにくいものがあり、同僚の日本語日

本文学科豊口和士先生に読めない部分についてご教示を賜った。深謝する次第である。ただし、最終的には筆者がご教示に基づいて判断して読んだので、その責はあくまで筆者にある。